

ミュージアム・マネジメントの実践（1）

—新十日町市博物館の取り組み—

Practice of the museum management: Approach of the new Tokamachi City Museum.

石原 正敏¹

ISHIHARA Masatoshi

新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）は、令和2（2020）年6月1日に開館した。新博物館の基本理念は、「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」である。十日町市の多様で豊かな自然と歴史・文化について、市民・来館者と共に探求し、保全・継承し、その価値を国内外に発信することをビジョンとしている。新博物館は、生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有している。展示は実物資料を中心とし、映像、音声、模型、参加体験型展示などの手法を取り入れ、誰もが親しめるわかりやすい展示となるように工夫している。また、解説文、音声ガイド、タッチパネルなどの多言語化（日本語・英語）にも取り組んでいる。

本稿では、旧博物館における40年の活動の歩みを振り返り、耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設へと方向転換した経緯について紹介する。また、新博物館の展示の特徴、開館後およそ1年半の運営にあたって、留意したことなどについて述べる。新型コロナウィルス感染症対策のほか、教育普及・展示事業、資料収集・調査研究・保存対策事業、資料燻蒸・移動作業など、事業の概要を紹介する。博物館には、いわゆる「表の顔と裏の顔」がある。資料の収集、整理、保管（修造）、調査、研究という仕事は裏の顔であり、展示や教育普及などが表の顔である。新博物館においては、文化財課と博物館という2つの組織が、車の両輪のごとく日々の業務に取り組んでいる。その中で、友の会活動、広域連携や地域連携、文化資源の魅力増進の取り組みなどについて、概要を紹介する。博物館活動においては、「調査研究」、「情報発信と後悔」が喫緊の課題であり、文化財の保存と活用においても、多くの課題がある。それらを踏まえ、課題解決に向けた方向性や方法等について考察する。

1. はじめに

十日町市は、なだらかな美しい山なみにかこまれ、悠久と流れてやまない大河・信濃川の両岸に河岸段丘が広がる十日町盆地の中心に位置している。南部には日本三大峡谷に数えられる清津峡があり、西部には日本三大薬湯のひとつ松之山温泉がある。この悠久の大地に住み継いだ先人たちは、自然からの恵みを活かして雪国の文化を育み、豪雪や洪水などの困難を乗り越え、美しい機を織り出しながら、今日に至る長い歴史を紡いできた。越後アンギンや近世越後を代表する産物の麻織物、越後縮の主産地であるなど、豊かな自然と文化に恵まれた歴史の

古いまちである。

十日町市博物館は、1979年（昭和54）年の開館以来、「妻有地方の自然と文化」をテーマに、基本理念に掲げた「市民生活に密着した実物教育機関として、いつでも誰でも見たり、調べたりできる、市民のための博物館」を目指して様々な活動を展開してきた。その中で、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料2,098点」（昭和61年指定）、同「十日町の積雪期用具3,868点」（平成3年指定）、火焔型・王冠型土器群をはじめとする国宝「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器57点（附871点）」（平成11年指定）などが生み出されている。そして、平成26（2014）年から準備を始め、開館41年目

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9

となる令和2（2020）年6月1日に新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）がオープンした。旧博物館における40年の活動の歩みを振り返り、耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設への方向転換、新博物館の展示の特徴、開館後およそ1年半の運営にあたって留意したことなどについて紹介する。合わせて、雪文化三館提携や信濃川火焰街道連携協議会など広域連携や地域連携の取り組み、文化資源の魅力増進の取り組みなどについて紹介するとともに、課題と課題解決に向けた取り組み等について考察することを本稿の目的とする。

2. 博物館の沿革

十日町市博物館の沿革は、以下の通りである。

昭和51（1976）年 文化財収蔵庫竣工

昭和53（1978）年 旧博物館竣工

昭和54（1979）年 博物館友の会設立（4/14）、旧博物館オープン（4/27）

昭和60（1985）年 十日町市史編さん室設置（平成9年度まで）

昭和61（1986）年 「越後縞の紡織用具及び関連資料2,098点」が重要有形民俗文化財指定

平成3（1991）年 「十日町の積雪期用具3,868点」が重要有形民俗文化財指定（4/19）、考古展示室オープン（5/7、2階の中世展示室は7/6）

平成4（1992）年 「笹山遺跡出土品928点」が国重要文化財指定（6/22）「雪文化三館」提携調印（11/21）

平成6（1994）年 旧博物館・常設展示室がリニューアルオープン（10/8）

平成10年（1998）旧博物館・考古展示室の一部改装

平成11年（1999）「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器57点（附871点）」が国宝指定（6/7）、梅原猛氏が名誉館長に就任（平成21年度まで）、開館・友の会設立20周年及び友の会新潟県教育委員会表彰受賞記念式典を開催（11/23）

平成13年（2001）国宝・火焰型土器No1の愛称「縄文雪炎」、マスコットキャラクター「ほのおまる」誕生

平成16年（2004）中越大震災発生（国宝が一部破損）

平成17年（2005）新十日町市誕生（周辺町村と新設合併）

平成22年（2010）国宝・火焰型土器No6が「日本の美5000年展」（トルコイスタンブル）へ出品

平成26年（2014）「新十日町市博物館基本構想（案）」策定

平成27年（2015）「新十日町市博物館基本計画」策定

平成28年（2016）新館基本・実施設計に着手

平成29年（2017）実施設計の終了、新館建設工事に着手、国宝・火焰型土器No1が「国宝展」（京都国立博物館）へ出品

平成30年（2018）国宝・火焰型土器No6が「縄文—一万年の美の鼓動—」展（東京国立博物館）へ出品、国宝・火焰型・王冠型土器（No5・16）がジャポニスム2018「深みへ展」（フランスパリ、チャイルド館）へ出品国宝・火焰型土器No1がジャポニ

スム2018「縄文展」（フランスパリ、日本文化会館）へ出品

平成31・令和元年（2019）新博物館本体建物の竣工（3月）、展示工事に着手（4月）、外構工事の竣工（7月）

令和2年（2020）展示工事の竣工（3月）、新博物館オープン（6月）

3. 耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設へ (1) 経緯

旧博物館を耐震化・改修し展示リニューアルを行うために、平成22（2010）年度に「十日町市博物館展示替え構想検討会」（委員5名）が3回開催され、「博物館としてのテーマ設定について」、「新博物館の特色について」、「資料収蔵と展示スペースについて」、「博物館の具体的な展示に向けた検討」、「雪に関する展示事例」の5項目について提言が行われた。その後、平成24（2012）年度までに耐震診断、改修基本計画の検討などが行われた。

平成25（2013）年9月2日、信濃川火焰街道連携協議会の第12回縄文サミット（総会）が開催され、構成市町の新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町の首長が揃った席上で、協議会顧問の小林達雄氏（國學院大學名誉教授）から「もうすぐ2020年のオリンピック・パラリンピック開催地が決定する。開催地が東京に決まつたら、聖火台のデザインに火焰型土器を採用してもらうとよいのではないか」という発言があり、5市町の首長はこぞって賛同の意を示した。そして、9月8日、IOC総会で2020年のオリンピック・パラリンピック開催地が東京に決定した。これを契機に、博物館リニューアル事業に新たな風が吹くことになった。まず、9月21日、下村博文文部科学大臣が十日町市を訪問し、新しく開校したふれあいの丘支援学校や博物館、国宝出土地・笹山遺跡などを視察した。この機会をとらえ、関口市長が「2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台デザインに国宝・火焰型土器を採用するよう」要望書を手渡した。さらに、12月19日には、関口市長が文部科学省を訪問し、下村大臣に国宝・火焰型土器のレプリカを贈呈した。このレプリカは、文部科学省旧館2階にある「情報ひろば」に、その日のうちに展示された。その後、「火焰型土器を聖火台に」の運動をPRするために、この運動のメッセージを入れた十日町市観光協会の名刺2種類の作成や、市内4か所に懸垂幕を掲出するなどの事業を展開した。

平成26（2014）年7月10日、信濃川火焰街道連携協議会第13回縄文サミットにおいて、「火焰型土器を2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に」のアピール宣言がなされた。また、首長の意見交換の中で火焰型土器を聖火台のデザインに採用してもらうのみでなく、オリンピックを契機に日本文化の源流である「縄文文化」を世界に発信することとし、協議会の5市町を核として、県外の市町村との連携も視野に入れながら活動を展開していくことが確認された。

新たな風が吹いたことを受け、平成25（2013）年度中に耐震改修・展示リニューアルの場合と、新館建設の場合の費用対効果について協議が行われた。その結果、耐震改修・展示リニューアル工事の場合、①約2年間の休館が必要となる、②増築工事をした建物のため、見学者の導線をうまく設定できない、③ジオラマは現在のままという計画であるため、リニューアル効果があまり期待できない、という課題が確認された。さらに、新館建設でないと縄文文化を前面に出した展示を行なうのは難しいとの結論に至り、新館建設について検討を進めることになった。平成26（2014）年10月末には、博物館職員で検討を重ねた新博物館の基本構想の素案を取りまとめられ、庁議による検討の結果、建設スケジュールを1年前倒しして、平成31（2018）年度のオープンを目指すことになった。

（2）新博物館の展示の特徴

新博物館は、「国宝・火焰型土器のふるさと－雪と織物と信濃川－」をテーマに、導入展示室「十日町プロローグ」、テーマ展示室Ⅰ「縄文時代と火焰型土器のクニ」、テーマ展示室Ⅱ「織物の歴史」、テーマ展示室Ⅲ「雪と信濃川」の4つの展示室で構成されている。実物資料の展示と合わせ、各種グラフィックやコンピュータを使い、解説パネルや映像資料等で文化資源について、解説・紹介を行っている。常設展示の主な展示項目に対して日本語・英語切り替え式の音声ガイドを25台備えている。「エントランスホール」では、ホワイト地形模型へのプロジェクションマッピングの手法を用いて、地域全体を俯瞰した地形、自然、風土、歴史文化を7つのストーリーと英語対応の動画と合わせて見ることができる。十日町市全体の歴史文化や観光情報を2か国語対応で検索できるタッチパネルを備えている。「導入展示室」では、各展示テーマのイメージ映像を大画面に映し

出すとともに、人感センサーにより壁面に各テーマの導入情報が表示され、入館者に興味を持たせる展示となっている。「縄文時代と火焰型土器のクニ」の展示室では、国宝「笛山遺跡出土深鉢形土器」のほか、県・市指定文化財など多くの館所蔵コレクションを展示している。触れることのできる国宝の高精細レプリカや火焰型土器の立体パズルなど体験型資料についても展示している。来館者が自由に選択した縄文人の衣服と自分の顔を合成したアバターが、狩猟や土器づくりなど縄文時代の生活をバーチャルに体験できる。東京国立博物館と共同研究で国宝・火焰型土器のCT画像の連続動画により、表面では見ることのできない土器の製作方法を確認できる。また、市内300箇所以上の縄文遺跡を時代別に検索できる大型タッチパネルにより、遺跡や遺物の写真も含めて2か国語で検索できるようになっている。「織物の歴史」の展示室では、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」を中心に展示し、古代から現代までの織物の生産工程や歴史などを通史的に理解することができる。各自が選択した織物のデザインと経糸と緯糸の色の組み合わせを選択することで、先染めの生産工程と着物に仕立てたオリジナルの絵柄をコンピュータグラフィックスで体験できる。また、現在見ることができない越後縮の生産工程を2か国語対応の解説と写真で見ることができる。「雪と信濃川」の展示室では、重要有形民俗文化財「十日町の積雪期用具」を中心に展示し、十日町市の歴史文化の舞台となる雪や信濃川について知ることができる。旧博物館にあった移築民家（十日町市中条菖沼から移築）を再移築した民家内に多くの民俗資料を展示している。雪の重さを体験できるコーナーや昔の雪国の生活シーンを復元した縮小模型、豪雪を写した大型写真などを展示している。信濃川や渋海川の成り立ちや利用状況などを大型グラフィックパネルにより4人まで英語対応の動画を見ることができる。移築民家内のディスプレイには、現在では見ることができない冬の状況や民話・昔話などを英語の動画で見ることができる。

4. 新博物館の運営

（1）職員体制、予算と来館者の状況

新博物館の令和2年（2020）度の職員体制は、正職員12名、会計年度任用職員4名でスタートした。正職員は博物館4名、文化財課8名（課長、課長補佐を含む）であり、互いに兼務する形となっている。会計年度

任用職員は、全て博物館の所属である。博物館には業務係、文化財課には文化財保護係、埋蔵文化財係の2係がある。土曜、日曜、祝休日については、正職員も当番勤務のローテーションに組み込まれる。年度途中異動のため、文化財課の正職員が1名減となった。新博物館の令和2（2020）年度の決算額は約44,000千円であるが、施設維持管理にかかる経費は約19,000千円である（会計年度任用職員の入件費を含み、正職員の入件費を除く）。令和2年度の入館者は、25,936名であった（十日町市博物館編2021b）。入館者の内訳は一般（有料）17,170名、一般（免除）3,982名、中学生以下4,784名であった。学校等団体は保育園6園、小学校28校、中学校17校、高校・専門学校・大学8校、子ども関連団体3団体であり、視察・見学等は107団体であった。

令和3（2021）年度は正職員11名、会計年度任用職員4名の体制でスタートした。年度初めに決めた職務分掌にそって事業を進めたが、事業の進捗状況や業務量を勘案して適宜見直しを行った。令和3（2020）年度の予算額は約64,000千円であるが、施設維持管理に係る経費は約34,000千円である（会計年度任用職員の入件費、物品販売仕入れ料を含み、正職員の入件費を除く）。令和3年度の入館者は、20,254名である（令和3年12月末日現在）。市内の小・中学校等に授業等での博物館利用の呼びかけをするとともに、新潟県博物館協議会の運営研究会（7月）、新潟県歴史資料保存活用連絡協議会の歴史資料保存活用研修会（11月）などの受入れにも取り組んでいる。

（2）新型コロナウイルス感染症対策

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和2（2020）年度は、以下の対応を行った。

①入館等の制限

- 5月30日 新館オープン記念セレモニー中止
- 6月1日 新館オープン、新潟県民限定・団体利用休止・
同時入館制限を100人程度に制限
- 6月19日～ 5都道県（北海道・東京都・千葉県・神奈川県・埼玉県）以外に居住する来訪者の入館制限解除
- 7月1日～ 居住地域による入館制限解除
- 8月1日～ 団体利用の制限緩和（40人程度の1組に限定して受入れ）

9月26日～11月8日 秋季特別展の企画展示室同時入室を20人に制限

②感染症対策

- ・非接触型体温計による入館時の検温
- ・風邪症状のある方及び37.0°C以上の発熱者入館制限
- ・入館時のマスク着用徹底
- ・館内の3密回避の呼びかけ
- ・入口及びトイレ出口付近に手指消毒液の配置
- ・ポリエチレン製使い捨て手袋の配布
- ・ゴミ箱の撤去（ゴミの持ち帰り推奨）
- ・1日2回の巡回消毒の実施
- ・閉館後の体験型展示消毒の実施
- ・音声ガイド端末のフィルムラッピング（イヤホン貸出中止）
- ・受付に飛沫防止シールドを設置
- ・空調システムの外気導入最大化

令和3（2021）年度は、上記の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に留意しながら、臨時休館等をすることなく開館した。緊急事態宣言、まん延防止等重点措置、新潟県独自の特別警報などが発令されている期間においても、団体利用の制限は行ったものの、地域を限定した入館制限等は行わなかった。11月中旬より、受付での使い捨て手袋の配布を休止している。

5. 事業の概要

（1）教育普及・展示事業

①教育普及事業

教育普及事業としては、博物館講座、古文書入門講座、子ども博物館の3つがある。

博物館講座は市民を対象としたもので、毎年6月頃に行っている。令和2年度は、縄文をテーマとして8月の土曜日（午後）に全3回シリーズで開催の予定であったが、首都圏における新型コロナウイルス感染症の再拡大を受け、急遽中止とした。令和3年8月に延期して実施した。

古文書入門講座は、古文書解読の初心者を対象としたもので、市内の史料をテキストにして古文書に親しむとともに、郷土の歴史を学ぶことを目的としている。令和2年度は、「御検地水帳」、「五人組帳」、「庚申夜話見聞録」、「峠道造直奉加帳」などをテキストとしている。7月から令和3年3月の土曜日（隔週・午前）に開催し、回

数は全15回である。受講生は計10人、内2人が新規の申し込み、その他は前年度からの継続であった。受講生よりテキスト代(2,000円)を徴収している。令和3年度は6月より開講し、令和4年3月まで全17回の開催を予定している。

子ども博物館は、市内の小学4~6年生対象の体験教室である。令和2年度は、「鶏頭冠突起作り」(8/1)、「縄文クッキーを作つてみよう」(12/12)を実施した。各回とも定員10名(事前申込)、参加費(500円・材料費)を徴収している。参加者は計14人であった。新型コロナウイルス感染症対策のため、保護者の参加は不可とした。鶏頭冠突起作りでは、オープン陶土を使用している。令和3年度は、「土器拓本しおり作り」(8/22)、「土器片消しゴムづくり」(12/18)を実施した。

②展示事業

展示事業としては、企画展、特別展、特設展示のほか、まちの文化歴史コーナーHAKKAKEの展示事業がある。令和2年度は、新館オープン記念・夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」(6/1~8/23、日本博参画事業)、新館オープン記念・秋季特別展「縄文の遺産ー雪降る縄文と星降る縄文の競演ー」(9/26~11/8、日本博参画事業)、特設展示「昔の道具」(12/19~1/24)、冬季企画展「マジョリカお召と黒絵羽織」(2/13~3/28)などを開催した。

夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」は、新博物館のオープンを記念して開催した。会期は84日間、観覧者数は計9,645人である。常設展示室と企画展示室の2会場とし、企画展示室では会期を前期(~7/12)と後期(7/14~)に分け、途中で土器の入れ替えを行った。常設展示室で計9点(深鉢8点、浅鉢1点)、企画展示室では計53点(前期:深鉢24点・浅鉢2点、後期:深鉢25点・浅鉢2点)を展示了。土器の入れ替えを行ったが、国宝指定の土器全ての展示は、平成16(2004)年の中越大震災以降、初めての機会であった。

秋季特別展「縄文の遺産ー雪降る縄文と星降る縄文の競演ー」は、会期44日間、観覧者数は計6,097人である。新潟県と長野・山梨県では、それぞれ縄文をテーマとしたストーリー「なんだ、コレは!信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化」と、「星降る中部高地の縄文世界ー数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅ー」が日本遺産の認定を受けている。本展では、これら3県から出

土している土器、土製品、石製品などの優品(国宝・重要文化財を含む)を集め、中部高地に華開いた独自の文化を紹介した。国宝「縄文のビーナス」実物の新潟県内での公開は、今回が初めてであった。10月17日(土)の午後には記念講演会を開催した。ミュージアムショップでは特設コーナーを設置し、展示品に関連したグッズを販売した。

冬季企画展「マジョリカお召と黒絵羽織」は、博物館友の会との共催で開催した。会期は44日間、観覧者数は2,973人である。昭和34(1959)年に彗星のごとく登場したマジョリカお召と、その後、PTAルックと呼ばれて一世を風靡した黒絵羽織、昭和30年代後半から昭和50年代にかけて大ヒット商品となった2つの十日町織物について、館蔵資料を中心に紹介した。本展では、博物館友の会・きもの研究グループによる調査成果を活用し、展示の準備にもグループから協力を受けている。同グループは平成25(2013)年に発足し、博物館収蔵の着物資料の整理を手伝うかたわら、銘仙、マジョリカお召、黒絵羽織など十日町織物の伝統と洗練された技術を後世に永く伝えるべく、活動を続けている。本展は、新博物館の基本理念「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」を体現するものとなった。

令和3年度は、新館オープン1周年記念・夏季特別展「形をうつすー文化財資料の新たな活用ー」(6/1~7/4)、夏季企画展「形の移り変わりー縄文から現代まで」(7/22~8/29)、新館オープン1周年記念・秋季特別展「岡本太郎が見て、撮った縄文」(10/2~11/14)などを開催した。また、新館オープン1周年記念事業の一つとして、愛称募集を行い、「TOPPAKU」に決定した。今後、特設展示「昔の道具」(1/4~2/6)、冬季企画展「明石ちぢみと十日町小唄」(2/19~3/27)を開催予定である。秋季特別展では、ミュージアムショップに特設コーナーを設置し、展示品に関連したグッズを販売した。冬季企画展では、博物館友の会・きもの研究グループによる調査成果を活用し、展示準備や期間中の展示説明等にもグループから協力を受ける予定である。

(2) 資料収集・調査研究・保存対策事業

①資料の収集

新博物館では市民等から十日町市に関係する民具・古文書・写真等の資料の寄贈を受けており、令和2(2020)年度の寄贈は36件であった。スッポン、コス

キ、ロウソクタテ、ゼンマイ採り用着物、道仕切りの木札、原町五旒旗、松代地域の民話音声資料（カセットテープ）などの民俗・民具資料、黒絵羽織、紅型・小紋等の型染め資料、マジョリカお召・見本帳などの着物資料、文化財・市内風景・祭りなどのポジフィルム及びプリントなど写真資料、飯山線開設関係文書・古文書・古典籍などの歴史資料、十日町小唄水墨画（中山晋平書・水谷八重子画）及び掛軸類など美術資料、十日町森林総合研究所観測記録及び中里養魚センター観測記録などの記録資料である。

令和3(2021)年度の寄贈は100件を超えていた（12月末日現在）。中尾神楽上演用具一式、昔の写真、雪まつり関係ほか写真データ・ポジ、十日町産地の着物（黒羽織・着物コート・お召縮緬ほか）、蓄音機、清水村庄屋家文書一括、太子講掛軸（明屋有照画賛）、スカリ等民具などである。

②資料燻蒸・移動作業

新博物館オープン準備のため、令和元（2019）年12月2日をもって旧博物館を休館とした。11月下旬に新博物館・展示室に展示する資料の燻蒸作業を新博物館トラックヤードで行った。12月上旬に事務室の機能を新博物館に移し、その後、国宝「笹山遺跡出土品」を新博物館・考古収蔵庫に移動した。令和2（2020）年1月中旬には、燻蒸済の着物資料を新博物館・着物収蔵庫へ、続く2月上旬に重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」のうち、燻蒸済の指定品を新博物館・民俗収蔵庫へ移動した。旧博物館の収蔵庫に収納されている、重要有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料」と「十日町の積雪期用具」を新博物館の民俗収蔵庫に移動するため、令和2（2020）年7月と12月に燻蒸作業を行った。作業は専門業者に委託している。7月は旧博物館2階の収蔵庫、12月には旧博物館1階の展示室を使用して包み込み（幅3m×奥行4m×高2m）による燻蒸を行った。また、7月には市指定文化財「群馬図屏風 雲谷等顔筆 六曲一双」（十日町市所蔵）も合わせて燻蒸している。同屏風については、これまで旧松之山小学校（現まつのやま学園）で、管理・保管していたが、劣化が著しく、保存環境に適した場所での保管が必要であるため、燻蒸後は新博物館の収蔵庫に収納することとした。

令和3（2021）年度は、10月に燻蒸作業を行い、燻蒸後は新博物館の収蔵庫に移動した。

（3）博物館友の会

これまで博物館の様々な活動を支えてくれたのは、館への理解・協力、支援団体でもある友の会である。昭和54（1979）年の友の会設立趣意書には博物館竣工のお祝いとともに、「これからは市民全体で、この施設を文化の殿堂に育てていかなければならぬと考えます」と謳われている。文字通り、開館以来、博物館は友の会によって育てられ、博物館と友の会が一体となって地域文化の振興に努めてきたといっても過言ではない。

思い返せば、昭和59（1984）年の開館・友の会設立5周年記念シンポジウム「妻有の文化を考える」（4/28）をはじめ、平成元（1989）年の開館・友の会設立10周年記念特別展「池田満寿夫」展（10/21～10/29）、平成6（1994）年の開館・友の会設立15周年記念特別展「棟方志功」展（10/8～10/23）、平成11（1999）年の「開館・友の会設立20周年及び友の会新潟県教育委員会表彰受賞記念式典、講演会「日本人らしく生きる」（講師：新潟県博物館協議会会長・伊藤文吉先生）、平成16（2004）年の開館・友の会設立25周年記念式典、野外パーティ、郷土記録賞表彰式（9/28）、平成21（2009）年の「博物館開館・友の会設立30周年記念式典、桂歌助落語会」（10/18）、平成26（2014）年の「博物館開館・友の会設立35周年／笹山遺跡出土品国宝指定15周年記念講演会「イタリアの考古学・日本の考古学」（文化庁長官・青柳正規先生）、「博物館開館・友の会設立35周年記念講演会「地域博物館の可能性」（講師：東京都美術館学芸員・佐々木秀彦先生）、令和元（2019）年の「博物館開館・友の会設立40周年／笹山遺跡出土品国宝指定20周年記念講演会「最新の研究からわかった縄文時代」（講師：国立歴史民俗博物館教授・山田康弘先生）（8/31）などの周年行事はもとより、昭和61（1986）年の「郷土植物園開園式」（11/17）、昭和63（1988）年の「遺跡ひろば開場式」（5/22）、平成3（1991）年の考古展示室全室オープン記念鼎談「雪はどのような文化をもたらしたか」（7/6）、平成4（1992）年の笹山遺跡出土品・国重要文化財指定記念講演「縄文芸術にせまる」（講師：金沢美術工芸大学教授・小島俊彰先生）、平成6（1994）年の「越後あんぎんシンポジウム」（11/12）、平成8（1996）年の「火焰フォーラムと縄文の夕べ」（10/12～10/13）、平成11（1999）年の笹山遺跡出土品「国

宝指定記念式典、同講演会「越後・新潟・火焰型土器のクニ」（講師：國學院大學教授・小林達雄先生）（7/3）、令和元（2019）年の「笹山遺跡出土品国宝指定20周年記念シンポジウム」（11/9）など、一体となって取り組んだ事業は枚挙にいとまがない（十日町市博物館・十日町市博物館友の会1999、同2009ほか）。

博物館友の会は令和3（2021）年度で42年目を迎えた。会員は同年12月末現在で約600名である。植物・古文書・いしづみ・歴史・方言・考古・きもの・民俗・近代史（世界遺産を学ぶ会）の9つの研究グループが、研究活動を行っている。令和2（2020）年度は総会（4月）、文化財めぐり（6月）、庚申供養祭（7月）、雪まつり・はくぶつかん広場（2月）、令和3（2021）年度は総会（4月）、文化財めぐり（6月）などが新型コロナウィルス感染症対策のため中止となった。

①令和2（2020）年度の活動

『火焰』137号発行（6/27）、研究グループ代表との懇談会（8/21）、『火焰』138号発行（9/12）、第90回文化財めぐり「群馬の新名所を訪ねる旅－完成した八ッ場ダム周辺見学・伊香保の新名所「法水寺」など－」（10/14）、3研究グループ（古文書・民俗・いしづみ）合同研修会 講演会「上杉謙信と戦国時代の魚沼」（講師：愛知大学文学部 山田邦明先生）（12/5）、『火焰』139号発行（2/13）、研究グループ発表会（3/13）

②令和3（2021）年度の活動

『火焰』140号発行（5/15）、研究グループ活動中間報告会・庚申供養祭（7/10）、『火焰』141号発行（9/11）、第91回文化財めぐり「北方文化博物館と新潟古町芸妓の舞」（10/14）、3研究グループ（古文書・民俗・いしづみ）合同研修会 講演会「妻側からの離縁状・その後」（講師：新潟県立文書館 本田雄二先生）（12/11）

6. 広域連携や地域連携の取り組み

（1）雪文化三館提携

豪雪地として知られる魚沼地方で、雪を扱りどころにしながら独自の活動を展開する、十日町市博物館、トミオカホワイト美術館、鈴木牧之記念館の三館は、平成4（1992）年11月21日に姉妹館として雪文化三館提携を結んでいる。

「魚沼地方は、新潟県内でも屈指の積雪地帯でありま

す。鈴木牧之が『北越雪譜』の中で、「雪ありて縮あり、されば越後縮は雪と人と氣力相半ばして名産の名あり」と述べているように、この地方には、雪と人が織りなす雪国特有の文化が息づいています。これが、雪の文化です。

十日町市博物館、トミオカホワイト美術館、鈴木牧之記念館は、それぞれ、雪の文化を象徴するモノと芸術とヒトの枠を集めた雪国文化の殿堂であります。人々はこの、雪を扱りどころにしながら独自の活動を展開する三館を巡観することによって、文化に及ぼす雪の力、雪の美しさ、雪の文化の多様性、そして文化遺産のすばらしさ等を再認識し、雪への理解と愛着を一層深めるものと確信します。私たち三館は、ここに姉妹館の関係を締結し、互いに協力して、新しい雪の文化の創造発展に寄与していくことを宣言します」と三館提携宣言にある。

その歩みを簡単に振り返ってみる。平成4（1992）年11月に三館提携調印及び提携記念講演会（「私の雪国体験」、講師：遠藤八十一先生）が開催された。その後、共通リーフレット、ロードマップ、三館共通入館券の作成、共同広告掲載、三館ホームページ開設（2000年～）などを行っている。リーフレットやスタンプラリー台紙等は改訂され、現在に至っている。平成6（1994）年には、三館関係者がトミオカホワイト美術館のミュージアムコンサートに参加している。平成7（1995）年からは三館関係者講話会が開始され、「博物館・美術館の入館者増をはかるには」（講師：原田健一先生）、平成8（1996）年は「トミオカ芸術の評価」（講師：長谷部昇先生）、平成9（1997）年には「雪の与えた生活文化」（講師：田中圭一先生）、平成10（1998）年には「わがまち・わが人生」（講師：丸山秀二先生）、平成11（1999）年には「トミオカホワイトについて」（講師：山本安雄先生）、平成13（2001）年には「魚沼の文化と文化施設」（講師：梅田健次郎先生）、平成15（2003）年には「博物館を学ぶ」（講師：青木豊先生）、平成16（2004）年には「外国人のみた雪文化」（講師：国際大学学生3名）、平成17（2005）年には「新十日町市の観光について～身近な資源を活かすために～」、講師：岩船真人先生）などが行われた。

平成9（1997）年には提携5周年記念企画三館巡観バスツアー、平成12（2000）年には大地の芸術祭「楽市楽座」参加、平成14（2002）年には巡回展「北越雪譜と魚沼の風土」の開催、『北越雪譜と魚沼の風土』刊行、三館で講演会開催（講師：小林達雄先生（トミオ

カホワイト美術館)、高橋実先生(鈴木牧之記念館)、市川健夫先生(十日町市博物館)などの提携10周年記念事業、平成19(2007)年には提携15周年記念写真展を三館で同時開催、提携15周年記念邦楽コンサート開催(トミオカホワイト美術館)、平成20(2008)年には出張特別展(長岡市立中央図書館)、平成22(2010)年には「真夏の火炎まつり」に三館共通ブース設置(8/21~8/22)、平成29(2017)年には提携25周年記念特別展が三館で開催(9~11月)された。互いに協力し、新しい雪文化の創造発展に寄与しようと始まったこの交流も令和4(2022)年に30周年を迎える。

(2) 信濃川火炎街道連携協議会

信濃川火炎街道連携協議会(以下、協議会)は、「火炎型土器」に代表される“縄文”をキーワードに、信濃川流域の市町村が交流・連携をはかり、地域振興や広域観光を推進することを目的として、平成14(2002)年8月に設立された。現在、十日町市、新潟市、三条市、長岡市、魚沼市、津南町の5市1町で構成されている。協議会会长は2年ごとに交代する。令和2~3年度は十日町市が会長市、新潟市が副会長市である。事務局は現在、十日町市文化財課(博物館)内にある。加盟自治体は規約により市は800千円、町は400千円を負担する。協議会は年間4,400千円の負担金で運営され、交流促進事業、情報発信事業、アピール事業などに取り組んでいる。

協議会においては、平成26(2014)年7月の第13回縄文サミットでのアピール宣言を契機として、「火炎型土器を2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に」という運動に取り組んできた。また、平成28(2016)年4月には『「なんだ、コレは!」信濃川流域の火炎型土器と雪国の文化』というストーリーが日本遺産に認定された。日本遺産を通じた地域活性化計画における将来像について、「火炎型土器や火炎型土器を作った人々が残した遺跡、縄文時代の人々が見た景観、火炎型土器の文化的遺伝子が引き継がれた雪国の民具などと地域固有の魅力ある資源を有機的に結びつけ、構成文化財が所在する地域の連携強化をはかり、日本遺産を活用した地域振興や広域観光を民間活力の協力も得ながら推進し、国内外広域に発信し流動人口の増加、来訪者の滞在時間・満足度の向上に努め、活力のある持続可能な日本文化・雪国文化の個性ある地域を目指す」として

いる。将来像を実現するための取り組みとして、①火炎型土器・信濃川火炎街道の魅力を国内外に向けて発信する、②火炎型土器が醸し出す地域づくりを推進する、③信濃川火炎街道で人やモノの交流拡大と観光振興を推進する、④火炎型土器を研究することによってブランド力の強化を図る、⑤火炎型土器、縄文集落、縄文文化の理解促進を図る、⑥地域の史跡と博物館・資料館の連携促進を図り、魅力を向上させ、ファン層の拡大を図る、⑦外国からの旅行者に本物の縄文暮らしを体験してもらい、縄文の魅力を知ってもらう、という7つの柱を設定している。

協議会では、平成28(2016)年度~平成30(2018)年度の3年間に文化庁の日本遺産魅力発信推進事業の補助金をうけて、事業を行なった。

【平成28(2016)年度】

・情報発信・人材育成事業

(ポスター、チラシ、パンフレット、多言語HP等作成、PRプロモーション映像撮影、スマートフォンアプリ制作、日本遺産広告設置(JR長岡駅にフロア広告、フラッグ広告))

・普及啓発事業

(日本遺産特別展の開催(國學院大學博物館)、日本遺産「国際縄文フォーラム火炎街道往来2016」の開催(國學院大學)、特別展図録『火炎型土器のデザインと機能』作成、日本遺産学習会の支援、外国人向けモニターツアーの実施)

・公開活用のための整備に係る事業

(日本遺産サイン看板設置(新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町))

【平成29(2017)年度】

・情報発信・人材育成事業

(デジタルガイドブック作成、PR用日本遺産関連動画撮影、日本遺産認定PR広告の設置)

・普及啓発事業

(日本遺産特別展の開催(京都大学総合博物館)、日本遺産「縄文フォーラム」の開催(京都大学)、特別展図録『火炎型土器と西の縄文』作成、特別展や日本遺産などのPR(羽田空港))

・公開活用のための整備に関する事業

(日本遺産縄文土器モニュメント設置(新潟市、魚沼市、十日町市、津南町)、日本遺産サイン看板設置(魚沼市))

【平成30(2018)年度】

・普及啓発事業

(日本遺産縄文フェス開催事業、日本遺産観光PR出展事業、モニュメントスタンプ用スタンプ及び台紙の作成)

・調査研究事業

(縄文グッズ、商品開発検討事業)

・公開活用のための整備にかかる事業

(日本遺産縄文土器モニュメント設置(十日町市))

令和元(2019)年度～令和3年(2021)度の3年間について同補助金はうけていないが、同補助金の対象となった事業は、日本遺産を通じた地域活性化計画の指標となっていることから、やめることが難しい。交流促進事業とアピール事業は協議会の活動の生命線であるため、削減は難しいが、事業の統合や事業規模の見直し等により、事業効果をあげていく必要がある。事業効果についての検証を隨時行いながら、令和4(2022)年度以降に向けて方向性を検討する必要がある。令和4(2022)年に協議会は設立20周年を迎える。

(3) 笹山じょうもん市、大井田賞、縄文川柳大会等への支援・協力

① 笹山じょうもん市

平成11(1999)年6月7日、火焰型・王冠型土器群をはじめとする笹山遺跡出土品が国宝に指定された。国宝指定をうけて中条地区振興会では、国の宝を名実ともに中条地域と十日町市の宝とし、遺跡の保存活用策を地元から積極的、具体的に提案し、その実現を図るために振興会の専門部として笹山遺跡保存活用委員会が設立された。

委員会の事業部は国宝1周年記念「笹山縄文の集い」を開催し、地域の年中行事に育てようと提案した。記念行事は、国宝指定1周年の機会に地元の大勢の目を笹山に向け、笹山遺跡・国宝との距離を縮めるのに役立つような行事としたい。そのために、大人も子どももつれだって「笹山・縄文」で遊び、楽しんでもらえるようなものにするという基本的な考え方から計画され、平成12(2000)年6月4日に第1回笹山じょうもん市が開催された。十日町市では、第2回から特別講師の招聘等にかかる経費等の一部を支援しており、現在の所管は文化財課(博物館)である。笹山じょうもん市は、令和4(2022)年6月で23回目を迎える。

② 大井田賞

平成3(1991)年に「第1回大井田氏サミット」が開催され、サミットを契機に「全国大井田同族会」が結成された。サミットは、第2回が平成5(1993)年に、第3回が平成8(1996)年に、第4回が平成15(2003)年に、第5回が平成25(2013)年に開催されている。全国大井田同族会は、平成4年から毎年、十日町市内の小中学校に図書券を贈呈してきた。平成15(2003)年の第4回サミットを契機に、全国大井田同族会との交流や連絡を図るために、大井田氏発祥の地とされる中条・大井田地区の関係団体の長を主体に「全国大井田氏交流連絡会」が組織された。事務局は、発足当初より十日町市博物館にある。「大井田賞」はスポーツや文化の活動並びにボランティア活動等において、顕著な活躍があった中条中学校の生徒に贈られる。大賞、優秀賞、奨励賞、特別賞の4つの賞があり、賞状と副賞が授与される。平成19年2月に「第1回大井田賞授賞式」が開催され、令和4(2022)年に第16回目を迎える。同事業に博物館(文化財課)が協力している。

③ 縄文川柳大会

平成26(2014)年に、国宝指定15周年を記念して縄文川柳大会が企画された。中条地区振興会、中条飛渡地域協議会、NPO 笹山縄文の里、中条公民館、笹山縄文俱楽部が実行委員会を組織し、準備・運営にあたっている。第1回大会に584句の作品が集まり、作品は年々増えており、第8回は1,000句を超える作品が集まった。令和2(2020)年、令和3(2021)年は、新型コロナウイルス感染症対策のため、表彰式等は中止となったが、縄文川柳大会は令和4(2022)年秋で9回目を迎える。事業の後援手続き、関係機関への周知等に文化財課(博物館)が協力している。

7. 文化資源の魅力増進の取り組み

(1) 縄文文化発信事業

縄文文化発信事業の概要は下記のとおりである。

平成27(2015)年度は、①縄文国宝サミット(仮称)の提案、②国宝・火焰型土器の大型写真看板作製、③縄文土器先生DVD制作、④JR大宮駅デジタルサイネージ掲載、などを実施した(十日町市博物館編2016)。平成28(2016)年度は、①リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック2016での「国宝・火焰型土器レブ

リカ」寄贈、②国宝・笹山遺跡深鉢形土器の3次元計測、などを実施した（十日町市博物館編 2017）。平成29（2017）年度は、①「国宝応援プロジェクト」、②「あの頃青春グラフィティ」のエフエム公開生放送（9/30）、③国宝・火焰型土器の京都国立博物館「国宝」展への出品、④「ASOBO JAPAN」（10/27～10/28）、⑤「縄文女子ツアー」（11/11～11/12）、⑥「縄文DOKI★DOKI！土器作り体験プロジェクト」（1/20～1/21）、⑦国宝・火焰型土器（指定番号1）の高精細レプリカ製作、などを実施した（十日町市博物館編 2018）。

平成30（2018）年度は、①国宝・高精細レプリカ展示（5/3、きものまつり協賛）、②国宝・火焰型土器の東京国立博物館「縄文－一万年の美の鼓動－」（7/3～9/2）への出品、③第2回縄文国宝首長連携懇談会の開催（8/10、東京国立博物館平成館）、④ジャポニスム2018：響きあう魂（全体開会式）、⑤国宝・火焰型土器のジャポニスム2018「深みへ－日本の美意識を求めて－」展（7/14～8/21）への出品、⑥国宝・火焰型土器のジャポニスム2018「縄文－日本における美の誕生－」展（10/17～12/8）への出品、⑦文化庁の「高校生ニッポン文化大使2018」に当市在住の高校生2名が任命、⑧JR大宮駅デジタルサイネージ掲載（10/1～10/31）、⑨国宝・王冠型土器の高精細レプリカ製作、などを実施した（十日町市博物館編 2019）。令和元（2019）年度は、①国宝・高精細レプリカ展示（5/3）、②国宝指定20周年記念講演会「縄文の美を捉える」（講師：東京国立博物館考古室長・品川欣也先生、6/1）、③「日本の美への誘い展」開催（日本博事業、8/8～9/20）、④国宝指定20周年／博物館開館・友の会設立40周年記念講演会「最新の研究からわかった縄文時代」（講師：国立歴史民俗博物館教授・山田康弘先生、8/31）、⑤JR大宮駅デジタルサイネージ（10/1～10/31）、⑥映画「縄文にはまる人々」上映会（10/9）、⑦国宝指定20周年記念シンポジウム「縄文の国宝」（11/9）、⑧縄文・里山文化による誘客促進事業（地方創生推進交付金事業）、などを実施した（十日町市博物館編 2020a）。令和2（2020）年度は、①野首遺跡出土品が新潟県文化財に指定、②国宝・火焰型土器モニュメント活用、③国宝・火焰型土器を含む特殊切手「国宝シリーズ第1集（考古資料）」の販売、④新館オープン記念・夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」の開催、⑤新館オープン記念・秋季特別展「縄文の遺産－雪降る縄文と星降る縄文の競演－」の開催、⑥秋季特別展記念講演会

「日本美術史における縄文的なもの」（講師：明治学院大学教授・山下裕二先生、10/17）の開催、⑦「十日町縄文ツアーズ・モニターツアー」の開催（11/4）、⑧「新館オープン記念フレーム切手」の発売（R3.2/16～）、などを実施した（十日町市博物館編 2021b）。

（2）とおかまちスノーカントリーミュージアム魅力増進事業

令和2（2020）年11月に、文化観光推進法に基づく十日町市の地域計画が国の認定を受けた。文化観光推進法は、文化についての理解を深める機会を充実させることで国内外からの観光客の来訪を促進し、文化観光の振興や地域の活性化を図る目的で令和2年5月に施行されている。十日町市の地域計画では、令和2年度～6年度の5年間にわたり、市内5つの文化観光拠点施設と市内に点在する文化資源を結びつけた事業を実施する。

新博物館では、令和2年度に①施設・設備の整備事業（入館券券売機のキャッシュレス化事業）、②文化資源の魅力増進事業（無形文化財資源データ映像化事業）、③文化資源の理解促進事業（博物館所蔵文化遺産体験事業）などを行った。

令和3年度は、①十日町市博物館所蔵文化遺産体験事業（土器風焼き物体験、雪国の遊び体験、ほんやらどう体験）、②博物館収蔵資料デジタルアーカイブ化事業（国宝・新潟県笹山遺跡土器（62点）三次元計測業務委託）、③博物館多言語化対応事業（展示パネル（日本語・英語）に他言語を追加（QRコード対応））、④博物館収蔵文化財に関する人材育成事業（講習会の開催：アンギン編み、チンコ口作り、雪の民具、雪国の保存食）、⑤文化観光拠点施設連携企画展等開催事業（「博物館－キヨロロ」連携企画展（10/23～3/13）、「博物館－情報館」連携企画展（第13回山内写真館資料写真展）（R4.3/10～3/22））、⑥文化財・地域資源を活用した商品開発事業（博物館所蔵の文化財を活用した商品開発、ワークショップ開催）の6つの事業を実施している。

8. 今後の課題

（1）博物館活動

新博物館は、かけがえのない地域の財産である「国宝・笹山遺跡火焰型土器群をはじめとした縄文文化」と

「古代にまで歴史がさかのぼる織物文化」、これらを生み出す原動力となった「雪と信濃川の恵みと文化」を守り継承して、その魅力を国内外に広く情報発信する施設である。新博物館の使命として①市民の知的関心に応えるため、資料や情報を収集・保管、調査・研究、展示・普及し、生涯学習の拠点としてその役割を果たす、②地域の歴史や文化に対する市民の理解を深め、より良い未来に向かって市民と共に新しい価値を創造する、③魅力ある財産として地域固有の歴史・生活文化・産業に光をあて、その活用を通じた来館者との交流により地域振興に貢献する、④市民及び来館者と対話しながら共に成長し、博物館友の会、他の博物館・関係機関と連携して活動する、の4点があげられている。新博物館の機能として、「展示」、「教育普及」、「資料収集・保存」、「調査研究」、「情報発信・公開」、「施設の管理・運営」、「ホスピタリティ」の7項目があげられている（十日町市博物館編2020b）。この中で、「調査研究」、「情報発信と公開」が喫緊の課題である。調査研究を継続的に行い、新たな事実や価値を博物館活動に反映していくことが重要である。また、誰もが調べることができる生涯学習の拠点として情報を発信し、収集した地域資料や図書、調査研究の成果であるデータベースなどの公開に向け、さらなる努力を重ねていく必要がある。

なお、参考資料として、旧博物館の入館者の推移を第1表～第2表に示した。旧博物館で開催された企画展・特別展を第3～第5表に、博物館講座を第6表～第9表に、まちの文化歴史コーナーHAKKAKEの展示を第10表に示した。今後の調査研究や教育普及活動の参考としていきたい。

(2) 文化財の保存と活用の推進

第二次十日町市総合計画後期基本計画において、基本方針2「活気ある元気なまちづくり」の政策4「誰もが自由に楽しく学び多様な文化にふれあえるまち」として、「文化財の保存と活用の推進」をあげている。十日町市固有の歴史や文化を保存するとともに、国・県・市の指定・未指定に関わらず、その価値を幅広く捉え、文化財を積極的に活用する。また、十日町市博物館を拠点に文化観光の推進に取り組み、地域文化の魅力を国内外に発信して地域活性化を図ること、を施策の方針に掲げている。この中で、具体的な施策として、文化財の保存と活用については、①十日町市歴史文化基本構想に基づき、有形・

無形の各種文化財の保存と活用を図り、広く情報発信し、「誰もが多様な文化にふれあえるまちづくり」を推進する、②日本遺産に認定された地域の文化・伝統ストーリーを国内外に発信し、地域の特色や歴史的魅力を伝えるなど、観光や産業分野とも連携しながら、文化観光の推進を図る、③文化財の総合的な保存と活用を図るため、文化財保存活用地域計画の策定を検討する、とある。本市の文化財に関する基本的・総括的なマスタープランである「十日町市歴史文化基本構想」を踏まえ、そのアクションプランとなる「十日町市文化財保存活用地域計画」を、令和4(2022)年度～令和5(2023)年度に策定するべく、検討中である。

文化財施設の整備と活用については、①十日町市博物館を歴史や文化にふれる文化観光の拠点として位置付けるとともに、縄文文化や日本遺産ストーリー関連施設の整備を行い、世界に向けてその魅力を発信する、②博物館の収蔵物などの文化財や、他館所蔵の国宝などの優良な文化財を活用した企画展を開催し、市民への教育普及活動を積極的に行う、③国宝出土地である笹山遺跡を中心とし、国史跡「田沢・壬遺跡」や県指定「野首遺跡出土品」などの縄文遺跡の保存や活用を図る。また、「生きた歴史体感プログラム」など縄文時代を体験・体感できる、ソフトプログラムを充実させる、とある。また、文化財の調査・研究と活用については、①歴史資料・民俗資料などの資料収集、整理分析、研究を行うとともに、その成果を広く一般に公開し、活用を図る、②埋蔵文化財の発掘・整理・分析・研究を行い、調査報告書を順次刊行するとともに、その成果を広く一般に公開し、活用を図る、とある。新博物館の基本理念、ビジョン、使命、機能に沿うよう活動を活発に展開するとともに、文化財の保存と活用の計画的な推進を図っていく必要がある。

9. おわりに

地域博物館の大切な目的の一つは、地域の人々の“ふるさと確認”でもある郷土学習への契機であり、生涯学習の場の提供である。これは、次に地域交流へと続く地域おこしであり、地域文化の核を創出することに繋がる。市民とともにこうした運動に取り組み、地域に根ざした活動を推進することこそ、十日町市博物館と友の会の原点であり、使命であると考えている。

平成4(1992)年に重文・火焰型土器No.1が「日本の古代展」(アメリカ ワシントンD.C.、アーサー・サッ

クラー美術館)へ出品された。その後、平成10(1998)年には重文・火焰型土器No.1が「縄文展」(フランス・パリ、日本文化会館)に、平成13(2001)年には国宝・火焰型土器No.1が「古代日本の聖なる美術展」(イギリス・ロンドン、大英博物館)に出品された。これら資料貸出は博物館の重要な機能の一つである。紙数に限りがあるため、実物資料、写真資料など資料の貸出、博物館実習、職場体験、火焰の都整備事業などを含め、稿を改めて検討の機会をもちたい。

この35年の間に、阿部恭平、阿部敬、井上信夫、今井哲哉、上野洋子、宇都宮正人、岡村和博、小熊博史、小野昭、貝瀬香、角山誠一、笠井洋祐、風間栄光、上村松雄、川村知行、木村英祐、久保禎子、小林隆幸、小林達雄、小林徳、斎木文夫、佐々木榮一、佐藤信之、佐藤雅一、眞田岳彦、佐野誠市、佐野芳隆、菅沼亘、竹内俊道、高木公輔、高橋由美子、滝沢栄輔、田村シゲ、田村実義、立木宏明、角田由美子、富井敏、長津政勝、中村由克、新田康則、橋本博文、林真子、樋口信一、平野勝、平山育夫、廣野耕造、藤木悌次、星野元一、松村実、水落辰美、宮尾亨、村山久夫、山田正毅の各氏をはじめ、多くの方々よりご指導・ご教示をいただいた。また、故人となられたが、甘粕健、石澤寅義、今福利恵、大島伊一、岡田稔、上村政基、小島俊彰、小林宏行、佐野良吉、島田靖久、須藤重夫、滝沢秀一、田村達夫、富澤孝之、中澤幸男、波形卯二、樋熊清治、廣田永二、藤本強、丸山克己の各氏から種々ご教示をいただいた。文末ではあるが記して厚くお礼申し上げる。

引用参考文献

- 石原正敏 2004『笹山遺跡』『縄文・弥生の遺産』安城市歴史博物館
石原正敏 2010『豪雪地帯に生まれた文化—火焰土器の世界—』『知つておきたい新潟県の歴史』新潟日報事業社
石原正敏 2015『「火焰型土器のクニ」から—笹山遺跡の土器、土製品や石器類』『東北学』05、はる書房
石原正敏 2018『国宝「火焰型土器」の世界 笹山遺跡』新泉社
佐野良吉 1990『妻有郷の歴史散歩』国書刊行会
佐野良吉 1982『隨想妻有郷—十日町地方の歴史と民俗—』国書刊行会
十日町市博物館 編 1988『ガイドブック 十日町市の遺跡』
十日町市博物館 編 1994『図説 越後アンギン』
十日町市博物館 編 1996a『火焰土器研究の新視点』
十日町市博物館 編 1996b『縄文の美—火焰土器の系譜—』
十日町市博物館 編 2015『十日町市博物館 年報 第1号』
十日町市博物館 編 2016『十日町市博物館 年報 第2号』
十日町市博物館 編 2017『十日町市博物館 年報 第3号』
十日町市博物館 編 2018『十日町市博物館 年報 第4号』
十日町市博物館 編 2019『十日町市博物館 年報 第5号』
十日町市博物館 編 2020a『国宝 笹山遺跡出土品のすべて (改訂版)』
十日町市博物館 編 2020b『十日町市博物館 要覧』
十日町市博物館 編 2020c『十日町市博物館 年報 第6号』
十日町市博物館 編 2000d『火焰型土器をめぐる諸問題—笹山遺跡の謎に迫る—』
十日町市博物館 編 2021a『常設展示案内ガイド』

- 十日町市博物館 編 2021b『十日町市博物館 年報 第7号』
十日町市博物館・十日町市博物館友の会 編 1999『十日町市博物館開館・博物館友の会設立20周年記念誌 国宝のまち モノが語る博物館』十日町市博物館・十日町市博物館友の会 編 2009『十日町市博物館開館・博物館友の会設立30周年記念誌 モノが語る博物館』
十日町市教育委員会文化財課 2018『十日町市歴史文化基本構想』十日町市
十日町市博物館、鈴木牧之記念館、トミオカホワイト美術館 編 2002『雪文化三館提携10周年記念企画 北越雪譜と魚沼の風土』十日町市博物館友の会

第1表 旧博物館の入館者数の推移(1)

年 度	大 人		小 人		合 計 () 内団体数	備 考
	個人	団体(数)	個人	団体(数)		
昭和54(1979)						博物館開館・友の会設立 入館料無料
昭和55(1980)						入館料無料
昭和56(1981)	7,401	8,215 (235)	3,387	1,997 (43)	21,000 (278)	入館料100円
昭和57(1982)	10,309	6,108 (226)	3,875	2,841 (56)	23,133 (282)	
昭和58(1983)	10,291	5,651 (205)	2,854	2,478 (52)	21,274 (257)	
昭和59(1984)	11,396	7,574 (205)	2,383	2,273 (34)	23,626 (239)	開館・友の会設立5周年
昭和60(1985)	7,266	5,559 (179)	3,120	1,370 (29)	17,275 (208)	越後縞資料重文指定
昭和61(1986)	8,787	5,700 (205)	6,755	3,551 (57)	24,793 (262)	郷土植物園開園
昭和62(1987)	7,434	6,637 (219)	3,904	2,030 (40)	20,005 (259)	
昭和63(1988)	10,274	4,718 (152)	3,207	1,869 (35)	20,068 (187)	遺跡ひろば開場 博物館増築工事
平成元(1989)	11,442	3,850 (123)	3,538	1,972 (41)	20,802 (164)	開館・友の会設立10周年
平成2(1990)	10,166	3,075 (126)	2,191	1,116 (22)	16,548 (148)	
平成3(1991)	9,899	5,837 (189)	3,297	1,819 (38)	20,852 (227)	積雪期用具重文指定 新館考古展示室オープン
平成4(1992)	10,460	4,908 (126)	3,099	2,138 (46)	20,605 (172)	笛山遺跡出土品重文指定 入館料200円
平成5(1993)	10,074	4,958 (134)	3,268	1,943 (45)	20,243 (179)	
平成6(1994)	9,678	2,889 (94)	2,956	1,623 (41)	17,146 (135)	開館・友の会設立15周年 新館考古展示室オープン
平成7(1995)	11,979	3,819 (115)	2,365	1,879 (53)	20,042 (168)	
平成8(1996)	11,255	4,592 (124)	2,011	1,598 (40)	19,456 (164)	
平成9(1997)	12,890	4,467 (130)	1,641	2,258 (62)	21,256 (192)	
平成10(1998)	13,718	2,985 (85)	1,803	1,350 (33)	19,856 (118)	
平成11(1999)	21,337	5,540 (159)	2,811	3,394 (65)	33,082 (224)	開館・友の会設立20周年 笛山遺跡出土品国宝指定
平成12(2000)	15,252	5,150 (134)	1,886	2,072 (49)	24,360 (183)	入館料500円 第1回大地の芸術祭
平成13(2001)	12,162	3,365 (91)	1,561	1,903 (42)	18,991 (133)	
平成14(2002)	11,368	2,230 (60)	1,720	1,429 (32)	16,747 (92)	
平成15(2003)	11,313	2,981 (81)	1,624	1,495 (27)	17,413 (108)	第2回大地の芸術祭
平成16(2004)	8,568	2,715 (77)	1,470	1,075 (31)	13,828 (108)	開館・友の会設立25周年 中越大震災(10/23)
平成17(2005)	10,829	1,458 (46)	1,398	2,431 (54)	16,116 (100)	入館料200円(団体150円)、 12月から豪雪
平成18(2006)	14,322	2,771 (76)	1,776	2,627 (69)	21,496 (145)	入館料300円(団体250円)、 第3回大地の芸術祭
平成19(2007)	11,663	2,384 (78)	1,356	3,294 (83)	18,697 (161)	中越沖地震(7/16)
平成20(2008)	10,617	2,261 (67)	1,519	2,668 (55)	17,065 (122)	
平成21(2009)	12,766	1,969 (47)	1,840	2,141 (49)	18,716 (96)	開館・友の会設立30周年 第4回大地の芸術祭

(大人は高校生以上・小人は中学生以下、団体は20人以上・小人の団体は学校単位)

第2表 旧博物館の入館者数の推移（2）

年 度	大 人		小 人		合 計 () 内団体数	備 考
	個人	団体(数)	個人	団体(数)		
平成22（2010）	10,778	1,431 (43)	1,964	1,661 (41)	15,834 (84)	東日本大震災（3/11） 長野県北部地震（3/12）
平成23（2011）	9,511	1,169 (33)	1,542	1,508 (45)	13,730 (78)	
平成24（2012）	15,493	1,138 (38)	2,001	1,630 (39)	20,262 (77)	第5回大地の芸術祭
平成25（2013）	11,241	806 (26)	1,250	1,461 (34)	14,758 (60)	
平成26（2014）	12,518	768 (30)	1,063	1,510 (38)	15,859 (68)	開館・友の会設立35周年 友の会員入館無料化
平成27（2015）	15,552	1,114 (36)	1,636	1,344 (27)	19,646 (63)	第6回大地の芸術祭
平成28（2016）	12,636	1,232 (37)	1,164	1,405 (32)	16,437 (69)	
平成29（2017）	12,033	962 (32)	1,251	1,126 (26)	15,372 (58)	
平成30（2018）	13,198	780 (27)	1,374	1,045 (32)	16,397 (59)	第7回大地の芸術祭
令和元（2019）	9,537	1,042 (32)	1,195	566 (8)	12,340 (40)	開館・友の会設立40周年 新館開館準備のため休館 (12/2～)
総 計	447,373	134,808 (4,122)	89,055	73,890 (1,645)	745,126 (5,767)	

(大人は高校生以上・小人は中学生以下、団体は20人以上・小人の団体は学校単位)

第3表 これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）（1）

年 度	特別展・企画展等の名称（期間）
昭和54（1979）	「越後のちぢみ展」（4/27～5/20）、「木の文化展」（8/4～31）、「星襄一遺作展」（10/12～14）、「菊と刀展」（10/27～11/4）、「雪の民具展」（2/7～29）
昭和55（1980）	「明石ちぢみ展」（5/1～6/8）、「新潟県の画家たち展」（8/9～17）、「庚申さまと庚申信仰展」（10/26～11/9）、「雪と雪の民具展」（2/13～22）
昭和56（1981）	「越後ちぢみと明石ちぢみ展」（5/3～6/7）、「日本の郷土玩具展」（11/1～8）
昭和57（1982）	「妻有の画人たち展」（8/25～29）、「妻有の文化財展」（10/30～11/7）
昭和58（1983）	「妻有の衣食住展」（8/10～31）、「近代日本洋画の巨匠たち展」（11/1～6）
昭和59（1984）	「日本画・洋画・巨匠たちの世界展」（9/1～5）、「明治・大正・昭和100枚の写真展」（10/20～11/4）、「目で見る十日町の歴史展」（11/11・中条公民館新座分館、2/8～17・下条公民館）
昭和60（1985）	「広重・東海道五十三次展」（9/1～5）、「全日写連写真展」（10/3～6）、「戦中・戦後のくらし展」（11/22～12/8）、「雪の造形写真展」（11/3・中条公民館大井田分館）
昭和61（1986）	「重文・越後縮資料展」（4/10～7/20）、「世界の大昆虫展」（8/26～9/7）、「女性をえがく展」（10/8～12）、「明治・大正・昭和写真展」（11/2～3・水沢公民館）
昭和62（1987）	「大正浪漫明石ちぢみの世界展」（4/9～5/17）、「信濃川の魚と漁法展」（8/23～27）、「妻有の画人たち展II」（10/17～25）、「雪の中のくらし写真展」（2/12～14）、「小坂遺跡と繩文人のくらし」（10/25・吉田公民館鎧島分館）
昭和63（1988）	「冬の生活用具展」（4/30～5/29）、「デザイン亀倉雄策展」（8/21～28）、「市史編さん資料展」（10/8～16）、「越後縮名品展」（2/10～12）、「昔のくらし写真展」（10/23・吉田公民館名ヶ山分館）、「水沢地域の城と館と遺跡展」（11/3～6・水沢公民館他）
平成元（1989）	博物館開館・友の会設立10周年記念「池田満寿夫展」（10/21～29）、「妻有の百三十三番写真展」（11/5～12・水沢公民館他）
平成2（1990）	「妻有の職人と道具展」（4/28～5/20）、「近世妻有俳諧と系譜展」（8/11～9/2）、「雪の造形と文様展」（10/13～21）、「幅上遺跡速報展」（11/3・吉田公民館鎧島分館）
平成3（1991）	「十日町の積雪期用具展」（8/11～9/1、2/8～16）、「大新田遺跡の調査記録」（10/27・鎧島小学校）
平成4（1992）	「積雪期用具展」（4/25～5/31）、「竹久夢二展」（10/10～26）

第4表 これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）（2）

年 度	特別展・企画展等の名称（期間）
平成5（1993）	「星裏一とスノリア展」（6/5～20）、「浮世絵名品展－中右コレクション」（10/9～25）、「カウカ平A・B遺跡・高島南原A・B遺跡調査記録」（10/31・鎧島小学校）
平成6（1994）	開館・友の会設立15周年／市政施行40周年記念「棟方志功展」（10/8～23）、「高橋喜平・雪の造形写真展」（2/16～20）、「中道・思川遺跡の調査」（10/30・真田小学校他）
平成7（1995）	「手工芸の美一編・組・刺繡三人展」（6/17～7/2）、「富士の写真家・岡田紅陽生誕100年記念展」（10/7～22）、「上梨子A・B遺跡調査」（11/5・西小学校）
平成8（1996）	「発掘調査速報展－平成3～7年度分」（6/15～30）、「縄文の美－火焔土器の系譜」（9/28～10/27）
平成9（1997）	「十日町の文化財展」（5/17～6/8）、「中条地区の遺跡調査」（10/25～26・中条小学校）
平成10（1998）	「インド先住民族アート展」（ミティラー美術館共催・4/17～5/5）、「妻有のいしぶみ展」（10/6～11/15）、第50回雪まつり記念「高橋喜平写真展－雪花譜」（2/19～21）
平成11（1999）	笛山遺跡出土品国宝指定記念「縄文の美パートII－火焔型土器の世界」（8/21～10/10）
平成12（2000）	「縄文の祭祀」（9/22～10/22）、「くらしの美 思い出の品々」（2/16～18）、「笛山遺跡とその出土品展」（6/3～4）
平成13（2001）	「民具からみた縄文の用具1－編・織用具と装身具－」（6/2～24）、「民具からみた縄文の用具2－食料調達と食事の用具－」（9/22～10/14）、「博物館収蔵資料展－越後縮を中心として－」（2/15～17）、「野首遺跡展」（11/4・下条公民館上新田分館）
平成14（2002）	「現代アートに挑戦するインド民族アートの世界展」（ミティラー美術館共催・4/26～5/19）、「きものでつづる十日町の歩み」（6/15～30）、雪文化三館提携10周年記念「北越雪譜と魚沼の風土」（10/26～11/10）、「博物館収蔵資料展－十日町のきものから－」（2/14～16）
平成15（2003）	全国大井田氏サミット10周年記念「大井田健一 父祖の地を描く」（5/17～6/8）、大地の芸術祭協賛「大地の息吹き－十日町の火焔型土器－」（7/20～9/7）、きもの歴史館開館記念「越後縮の文様と美」（10/4～28）、「収蔵資料展－暮らしを彩る着物と品々－」（2/20～22）
平成16（2004）	国宝指定5周年記念「国宝と地域の宝物－十日町の火焔型土器II－」（6/1～30）、「博物館と友の会の四半世紀」（7/10～25）、市制施行50周年記念「十日町市50年の歩みと暮らし」（9/29～11/3）、火焔街道博学連携プロジェクト「子ども縄文研究展」（11/21～12/25）
平成17（2005）	「女性の着物と装い－髪飾り・櫛と簪と笄と－」（6/11～7/3）、「博物館収蔵資料展－生活用具を中心に－」（8/9～21）、「カストリ雑誌・戦後出版文化の一断面－西潟浩平コレクション－」（8/9～21）、「新・十日町市の宝物－地域に息づく文化財－」（10/8～11/6）、「子ども縄文研究展」（11/20～12/4）
平成18（2006）	「越後の布一暮らしの中の着物－」（7/22～9/10）、「梵字・曼荼羅展」（10/7～22）、「子ども縄文研究展」（11/23～12/6）、「博物館収蔵資料展－きものと資料と孔版画－」（2/16～18）
平成19（2007）	「十日町のやきもの－縄文時代草創期、火焔型土器、そして妻有焼へ－」（8/25～9/24）、「残された雪国の記憶－雪国の暮らしを写す－」（10/6～11/4）、「出土品が語る新潟の歴史」（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団共催・11/10～12/9）、「子ども縄文研究展」（12/22～1/14）、「博物館収蔵資料展－軸物を中心に－」（2/16～18）
平成20（2008）	「十日町市の中世遺跡－発掘された集落・居館－」（8/12～9/15）、「岡田紅陽富士写真展」（10/11～26）、「博物館に寄託・寄贈された考古資料」（11/8～24）、「子ども縄文研究展」（12/20～1/12）、「博物館収蔵資料展－着物を中心に－」（2/20～22）、雪文化三館提携事業「雪と人が織りなす文化」（9/13～15・長岡市中央図書館）
平成21（2009）	博物館開館・友の会設立30周年記念「縄文人の道具箱 野首遺跡展」（8/1～9/13）
平成22（2010）	「壊されるモノ－土偶・石棒・石皿からみた縄文の祭祀－」（7/31～9/5）、「信濃川上・中流域の縄文時代草創期遺跡」（11/2～28）
平成23（2011）	「縄文のKAZARI－顔を飾る縄文人－」（7/30～9/11）、「十日町市内遺跡発掘調査速報展」（11/26～3/25）
平成24（2012）	「四大麻布－越後縮・奈良晒・高官布・越中布の糸と織り－」（7/21～8/19）、「異形の縄文土器」（9/22～11/4）、「昭和の残映－博物館に寄贈された昔の資料－」（2/2～3/3）、「縄文の華 十日町市の国宝・火焔型土器展」（8/3～9/30・星と森の詩美術館）
平成25（2013）	「箱の中の虫－昆虫博士・樋熊清治氏標本コレクション－」（7/20～8/25）、「ビジュアル縄文博物館－縄文人の衣食住、そして土器－」（9/21～11/10）、「子ども縄文研究展2013」（1/18～2/16）
平成26（2014）	博物館開館・友の会設立35周年記念「松代の石仏－里山の祈りと信仰－」（7/19～8/24）、「縄文前期のムラ 赤羽根遺跡－火焔型土器の出現前夜－」（9/27～11/9）、「子ども縄文研究展2014」（1/17～2/15）
平成27（2015）	「カストリ雑誌とその時代－西潟浩平氏コレクション－」（7/25～8/30）、「縄文後期の墓 栗ノ木田遺跡－縄文人の死と弔い－」（10/3～11/8）、「子ども縄文研究展2015」（1/16～2/21）

第5表 これまでに開催された企画展・特別展（移動展・巡回展含む）（3）

年 度	特別展・企画展等の名称（期間）
平成28（2016）	「館蔵資料展 市民からの贈り物」（7/30～8/28）、「土器づくりの考古学」（10/1～11/6）、「子ども縄文研究展2016」（1/14～2/19）
平成29（2017）	「野首遺跡出土品のすべて」（7/8～8/27）、新潟県埋蔵文化財センター巡回展「縄文の造形美－六反田南遺跡－」（7/8～8/27）、「動物の意匠－人と生き物のかかわり－」（9/30～11/5）、雪文化三館提携25周年記念展「雪と生活」（9/14～11/20）、「子ども縄文研究展2017」（1/20～2/18）、「十日町のきもの歴史展」（5/3～4・十じろう）、「野首遺跡出土品展」（11/5・下条中学校）
平成30（2018）	「十日町のきもの歴史展」（5/8～27）、「縄文土器繚乱－十日町市の土器いろいろ－」（7/28～8/26）、「機織りのムラ 馬場上遺跡」（9/29～11/4）、「子ども縄文研究展2018」（1/4～2/17）、「十日町のきもの歴史展」（5/3・十じろう）
令和元（2019）	「十日町のきもの歴史展」（5/8～26）、博物館開館・友の会設立40周年記念「博物館と友の会 40年の歩み」（7/27～9/16）、「十日町のきもの歴史展」（5/3・十じろう）

第6表 旧博物館で開催された博物館講座（1）

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
昭和60（1985）	十日町を知る ① 6/12 「考古学から見た十日町」 阿部恭平（十日町市博物館学芸員）、② 6/28 「信濃川と河岸段丘－十日町の地勢－」 仲野浩平（津南中学校教諭）、③ 7/9 「十日町織物の歴史と文化」 佐野良吉（十日町織物工業協同組合参与）、④ 8/30 「十日町の文化財と織物工場視察」 佐野良吉（同）、⑤ 9/10 「子供と民俗行事」 駒形駆（川西高校校長）、⑥ 10/8 「十日町の雪の記録から（雪の科学－十日町の雪の特徴－）」 渡辺成雄（林業試験場十日町試験地主任）、⑦ 11/19 「雪処理の科学技術－雪国の今日と明日－」 栗山弘（科学技術庁国立防災科学技術センター雪害実験研究所）、⑧ 12/3 「学校教育と博物館」 竹内俊道（十日町市博物館学芸員）
昭和61（1986）	十日町を知るII ① 4/22 「博物館と学校教育」 竹内俊道（十日町市博物館学芸員）、② 5/9 「越後縮資料は語る」 滝沢秀一（十日町市博物館調査研究員）、③ 5/21 「十日町の城跡」 丸山克己（十日町市史編さん室主査）、④ 6/10 「十日町織物の歴史と現況－織物工場視察－」 佐野良吉（十日町織物工業協同組合参与）、⑤ 7/9 「信濃川の水害と治水」 須藤重夫（十日町市史編さん委員）、⑥ 8/29 「秋山の民具と河岸段丘－津南方面視察－」 仲野浩平（津南中学校教諭）、⑦ 9/4 「昆虫の世界」 滝沢伸介（日本アジア虫の会）、⑧ 11/5 「雪国の生活 今と昔」 渡辺成雄（前林業試験場十日町試験地主任十日町）・駒形駆（川西高校校長）・星名甲子郎（雪と生活研究会幹事長）
昭和62（1987）	自分たちの住む町を知ろう ① 6/27 「武士の戦いと日常（上杉時代の妻有）－城館跡を訪ねてI－」 丸山克己（十日町市史編さん室主査）、② 7/11 「新田一族の進出と妻有地方の中世」 佐野良吉（十日町織物工業協同組合参与）、③ 7/25 「遺跡が語る大昔のくらし－原始から古代へ－」 大島伊一（十日町市文化財保護審議会委員）、④ 8/1 「幕藩体制と妻有の村々」 須藤重夫（十日町市史編さん委員会近世史部会長）、⑤ 8/8 「妻有の大地はどのようにしてできたか－信濃川と河岸段丘の形成－」 仲野浩平（津南中学校教諭）、⑥ 8/29 「村と庄屋と庶民たち」 上村政基（十日町市史編さん委員会近・現代史部会長）、⑦ 9/5 「大井田氏とその周辺－城館跡を訪ねてII－」 佐野良吉（十日町市史編さん委員会副委員長）・丸山克己（十日町市史編さん室主査）、⑧ 9/19 「会津戦争と妻有の人々」 金子幸作（川西町教育委員長）
昭和63（1988）	妻有・十日町地方の心をさぐる ① 5/14 「自然の中の神々－自然と人々－」 桜井徳太郎（十日町市史監修者・駒沢大学学長）、② 5/21 「妻有地方の野仏たち－人々の願い①－」 上村政基（十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員）、③ 5/28 「妻有地方への仏教の広がり－人々の願い②－」 竹内道雄（十日町市史編さん委員長・愛知学院大学教授）、④ 6/11 「村の神さま－人々の願い③－」 駒形駆（十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員）、⑤ 6/18 「村の中の相互扶助－暮らしと助合い①－」 滝沢秀一（日本民俗学会会員・十日町市史編さん調査員）、⑥ 6/25 「飢餓の中の救世主－暮らしと助合い②－」 本山幸一（十日町市史編さん調査員・中越教育事務所指導主事）、⑦ 7/2 「妻有地方の教育のあけぼの－教育と文化①－」 佐野良吉（十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員）、⑧ 7/9 「戦後の文化を育んだ人々－教育と文化②－」 田村喜一（十日町市博物館協議会副委員長・市史編さん調査員）
平成元（1989）	妻有の人物史I ① 5/27 「坂下門外で斃れた勤皇の志士 河本杜太郎（正安）」 佐野良吉（十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員）、② 6/3 「諫訪山の天狗が庶民の悩みを代弁 服部泰庵」 上村政基（十日町市史編さん委員・文化財保護審議会委員）、③ 6/24 「麻から絹へ、十日町織物再生の功労者 宮本茂十郎」 滝沢栄輔（十日町市博物館協議会委員長・市史編さん調査員）、④ 7/8 「江戸の名医、現代漢方医学の祖 尾台良作（榕堂）」 須藤重夫（十日町市史編さん委員）、⑤ 7/22 「学問振興と人材育成に尽くした教育者 高橋茂一郎（翠村）」 田村喜一（十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん調査員）

第7表 旧博物館で開催された博物館講座（2）

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
平成2（1990）	妻有の人物史II ①7/14「十日町織物の近代化に尽くした人々 根津五郎右衛門・蕪木八郎右衛門」佐野良吉（十日町市史編さん副委員長・文化財保護審議会委員）、②7/21「多くの偉材を育てた学徳兼備の高僧惟寛和尚をとりまく人々」渡辺賢一（円通寺住職）、③7/28「江戸相撲の名行司木村瀬平と幕末の相撲界」田村喜一（十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん委員）、④8/4「日本三竹の1人と称された竹画の巨匠木村雪翁と大肝煎・闇口家」上村政基（十日町市文化財保護審議会委員・市史編さん委員）、⑤8/11「近世妻有の俳諧の系譜をたどる 根津桃路・上村山之・青山幽嘯」須藤重夫（十日町市史編さん委員）
平成3（1991）	時間（とき）の軌跡をたずねて ①7/13「中世編 戦乱と武士（もののふ）たち—妻有の中世ー」山田邦明（東京大学史料編纂所所員）、②7/20「古代編 古代史のなかの越後と妻有」小林昌二（新潟大学人文学部教授）、③7/28「原始編 繩文の生活様式—適応と創造ー」渡辺誠（名古屋大学文学部教授）
平成4（1992）	雪の中の暮らしを考える ①8/22「雪の科学と雪害の防止」中村勉（長岡雪氷防災研究所所長）、②8/29「雪国の風土と文化」高橋実（小千谷高校教諭）、③9/5「雪とともに生きる暮らし」鈴木哲（新潟大学工学部教授）
平成5（1993）	戦国乱世の人物像 ①8/7「戦国時代の妻有」山田邦明（東京大学史料編纂所所員）、②8/14「描かれた中世—洛中洛外図の中の人々ー」石田尚豊（聖徳大学教授）、③8/21「中世越後の豪族たち」阿部洋輔（新発田高校教諭）、④8/28「戦国大名とはなんだったのか」藤木久志（立教大学教授）
平成6（1994）	絵図面が語る郷土の歴史 ①6/4「地図や絵図から歴史を読む」青山宏夫（新潟大学助教授）、②6/11「絵図面に見る山の論争」木村秀彦（柏崎農業高校・高柳分校教諭）、③6/18「村絵図から見た河岸段丘の開発」松永靖夫（元三条高校教諭）
平成7（1995）	太平記からの贈物—信濃川中流域の中世ー I 学習ツアーハー 6/8~9「越後から鎌倉へー新田義貞の鎌倉攻めを追うー」佐野良吉（十日町市史編さん委員）、II 史跡探訪 7/22「関東への道」丸山克己（十日町市史編さん室長補佐）、III 講座（講義）①8/5「越後の新田一族ーその活躍と悲劇」赤澤計真（新潟大学人文学部教授）、②8/12「中世の武士（もののふ）たちー戦いのありさま」山田邦明（東京大学史料編纂所所員）、③8/19「中世の精神世界へ①ー佛像・祈りのかたちー」西川新次（慶應義塾大学名誉教授）、④8/26「中世の精神世界へ②ー念仏・遊行の聖と民衆ー」大橋俊雄（日本文化研究所講師）
平成8（1996）	縄文の技とこころ ①7/14「縄文からのメッセージー魅惑の真髄びとー」加藤三千雄（能都町真脇遺跡展示室）、②7/28「縄文心象ー日蝕土器の系譜ー」武居幸重（諏訪縄文文化研究会）、③8/11「縄文生活の再現ー実験考古学入門ー」楠本政助（石巻考古学研究所）、④8/25「縄文人の共同性」後藤和民（創価大学教授）
平成9（1997）	十日町市史を読むIー江戸時代の社会と人々ー ①9/13「村の掟（おきて）ー村決でみる盜みへの制裁ー」本田雄二（長岡高校教諭）、②9/20「善光寺街道と松之山街道」桑原孝（十日町市史編さん委員）、③9/27「縮間屋と奉公人」杉本耕一（新潟高校教諭）、④10/4「妻有俳諧の先駆者たちー上村山之と根津桃路ー」須藤重夫（十日町市文化財保護審議会委員）、⑤10/11「飢饉と村の生活ー農民たちの危機管理ー」本山幸一（十日町市史編さん委員）、⑥10/18「日記にみる農家の一年」松永靖夫（農学博士）、⑦10/25「山の利用と紛争ー六箇村の入会ー」（堀之内高校教諭）
平成10（1998）	十日町市史を読むIIー近・現代の諸相ー ①7/25「自由民権運動と妻有の風土」本間恂一（新潟県政記念館館長）、②8/1「十日町産地は大火の危機をどのように克服したかー染織学校の設立と中村喜一郎先生ー」佐野良吉（十日町市文化財保護審議会委員）、③8/8「ほくほく線への長い道のりー鉄道誘致運動の苦闘ー」上村政基（十日町市文化財保護審議会委員）、④8/22「雪国のかどもたちーわらべ歳時記ー」駒形恵（新潟県民俗学会会長）、⑤8/29「娯楽の王様・映画と若者」田村喜一（十日町市文化財保護審議会委員）
平成11（1999）	十日町市史を読むIIIー原始・古代・中世の十日町ー ①7/24「火焔土器の時代ー塙山遺跡を中心にー」小熊博史（長岡市立科学博物館）、②7/31「古代の人々のくらし」高橋勉（新井市教育委員会）、③8/7「越後の中世考古学と妻有郷の遺跡」鶴巻康志（新発田市教育委員会）
平成12（2000）	縄文研究最前線・縄文時代はここまでみえてきたー現代人のための縄文講座ー ①7/29「縄文人の住環境ー縄文人の住居を調べるー」荒川隆史（財・新潟県埋蔵文化財調査事業団主任調査員）、②8/5「縄文時代の生活復元ー縄文人の暮らしを見つめるー」渡辺裕之（新潟県立歴史博物館主任学芸員）、③8/12「縄文世界の精神風土ー縄文の記憶を追ってー」原田昌幸（文化庁美術工芸課文化財調査官）、④8/19「縄文人の交流と交易ー奥三面から見えてきたことー」高橋保雄（朝日村奥三面遺跡調査室係長）
平成13（2001）	モノと暮らしの知恵を学ぶー道具と技術を考えるー ①7/28「石の利用法ー石器と石製品ー」前山精明（巻町教育委員会学芸員）、②8/4「民具と道具」久保禎子（一宮市博物館学芸員）、③8/11「縄文時代の道具箱」宮尾亨（新潟県立歴史博物館学芸員）、④8/18「縄文の工芸技術」小柴吉男（三島町文化財専門委員）

第8表 旧博物館で開催された博物館講座（3）

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師（敬称略、所属は当時）
平成14（2002）	道・人と地域をつなぐものー地域と文化の交流を考えるー ① 7/27「善光寺街道をゆく人々」丸山克己（前十日町情報館長）、② 8/3「織物技術の伝播を追って」坂本育男（福井県立博物館学芸員）、③ 8/10「塩の道を歩く」土田孝雄（糸魚川市文化財保護審議会委員）、④ 8/17「海上の道ー交易と交流ー」藤本強（國學院大學教授）
平成15（2003）	時の記憶を手がかりにー資料から歴史を読み解くー ① 7/26「仏像が語りかけるものーその心とかたちー」川村知行（上越教育大学助教授）、② 8/2「古文書から見えてくること」本井晴信（新潟県立文書館専門文書研究員）、③ 8/9「その後の大井田氏を追って」佐野良吉（新潟県民藝協会会長）、④ 8/23「石佛・石塔の分布は語るー地域の信仰と歴史ー」渡辺三四一（柏崎市立博物館学芸員）
平成16（2004）	地域をつなぐ物語ー郷土の歴史と文化を訪ねてー ① 7/31「中里編 桔梗原の開田ー庄屋・村山家の人々」村山詔平（中里地域開発㈱マネージャー）、② 8/7「十日町編 縮問屋の台所事情」丸山克己（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 8/21「川西編 板碑は語るー中世の世界ー」千々和到（國學院大學教授）、④ 8/28「松代・松之山編 松代・松之山の歴史散歩」鈴木栄太郎（上越市史編さん室専門員）
平成17（2005）	地域をつなぐ物語IIー郷土の歴史と文化を訪ねてー ① 7/23「新市域の自然と景観ーこの素晴らしき大地ー」井上信夫（十日町市文化財保護審議会委員）、② 7/30「新市域の街道と山城ー古い歴史を刻む大地ー」丸山克己（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 8/6「川西・中里の文化財ー現地見学ー」星名寛（十日町市文化財保護審議会委員）、④ 8/20「松代・松之山の文化財ー現地見学ー」鈴木栄太郎（十日町市文化財保護審議会委員）
平成18（2006）	災害の歴史から郷土を学ぶ ① 7/29「松之山の地すべりー大地が動くー」村山悦夫（松之山教育事務所社会教育指導員）、② 8/5「十日町の大火始末記ー焦土から立ち上がるー」佐野良吉（郷土史研究家）、③ 8/19「日本の大地震と郷土の人々ー大地が震えるー」須藤重夫（郷土史研究家）
平成19（2007）	魚沼を学ぶ ① 7/21「魚沼の文化交流を探るー鈴木牧之の交友からー」貝瀬香（鈴木牧之記念館学芸員）、② 7/28「白の世界に魅せられてー富岡惣一郎と魚沼ー」高石真理子（トミオカホワイト美術館学芸員）、③ 8/4「魚沼の大地と火焔型土器ー故郷の縄文時代ー」石原正敏（十日町市博物館学芸員）
平成20（2008）	魚沼を学ぶII ① 7/19「原始の魚沼ー縄文時代を中心ー」石原正敏（十日町市教育委員会）、② 7/26「古代の魚沼ー古墳時代を中心ー」安立聰（南魚沼市教育委員会）、③ 8/2「中世の魚沼ー魚沼地方の中世城館跡の特徴ー」鳴海忠夫（新潟県考古学会会員）、④ 8/9「魚沼楽（学）のススメ」佐藤雅一（津南町教育委員会）
平成21（2009）	大河ドラマ「天地人」を学ぶ ① 7/4「考古学的に見た坂戸城跡ー居館跡を中心としてー」藤原敏秀（南魚沼市教育委員会）、② 7/11「史料から探る直江兼続の妻おせん」田中洋史（長岡市立中央図書館文書資料室）、③ 7/18「会津120万石と「直江状」」福原圭一（上越市総務課公文書館準備室）
平成22（2010）	新潟県の考古学最前線 ① 7/3「新潟県の縄文時代遺跡ー近年の発掘調査成果を中心にー」渡辺裕之（新潟県教育行政課）、② 7/10「弥生時代研究の現在（いま）」古澤妥史（阿賀野市教育委員会生涯学習課）、③ 7/17「越後で古墳が造られたころー魚沼地方の古墳人（ひと）の暮らしぶしー」尾崎高宏（財・新潟県埋蔵文化財調査事業団） 考古資料からみた十日町市の歴史 ① 9/18「縄文時代① 遺跡の調査からわかる縄文人のくらしー前・中期を中心にー」石原正敏（十日町市博物館学芸員）、② 10/2「中世 十日町に武士がいたころー中世の人々の暮らしぶしー」菅沼亘（十日町市博物館学芸員）、③ 10/16「縄文時代② 土の器を作り始めた頃の十日町ー久保寺南遺跡を中心に佛像・祈りー」笠井洋祐（十日町市博物館学芸員）
平成23（2011）	新潟県の考古学最前線II ① 7/2「発掘が語る古代の越後・佐渡」春日真実（財・新潟県埋蔵文化財調査事業団）、② 7/9「新潟平野の舟運から古代・中世の流通を復元するー近年の研究成果からー」鶴巻康志（新発田市教育委員会生涯学習課）、③ 7/16「越後における肥前陶磁器の流通」安藤正美（見附市教育委員会教育総務課）
平成24（2012）	郷土の遺産I 越後縮 ① 6/16「越後縮の歴史」竹内俊道（前十日町市博物館長）、② 6/23「御用縮の世界ー受注から納品までー」丸山克己（十日町市文化財保護審議会委員）、③ 6/30「越後縮と江戸時代の麻布産地」吉田真一郎（近世麻布研究所）
平成25（2013）	郷土の遺産II 自然 ① 6/15「段丘に記録されている自然災害を考える」ト部厚志（新潟大学災害・復興科学研究所准教授）、② 6/22「雪里・十日町市の特徴的な昆虫たち」鶴智之（越後松之山森の学校キヨロロ研究員）、③ 6/29「多雪地の植物たちの多様な生き方とそのめぐみ」小林誠（越後松之山森の学校キヨロロ研究員）

第9表 旧博物館で開催された博物館講座（4）

年 度	博物館講座のテーマ・日時・演題・講師
平成26（2014）	郷土の遺産III 石仏 ① 6/14「下越の石仏と民俗行事」大楽和正（新潟県立歴史博物館研究員）、② 6/21「中越ぶらり石仏探訪—ぶらり出かけ、めぐりあった路傍の石仏あれこれー」桑原和位（つまり石仏の会会員）、③ 6/28「大光寺石と石仏」大坪晃（新潟県石仏の会会員）
平成27（2015）	郷土の遺産IV 火焰型土器 ① 6/13「科学の目で見る火炎土器」宮内信雄（十日町市博物館調査研究員）、② 6/20「火焰型土器のつくり方」宮尾亨（新潟県立歴史博物館専門研究員）、③ 6/27「美術から見た縄文土器—火焰型土器の登場ー」鈴木希帆（東京国立博物館アソシエイトフェロー）
平成28（2016）	郷土の遺産V 野首遺跡土器の魅力 ① 6/11「千曲川流域の土器のお手本—長野県から見た野首遺跡出土土器ー」寺内隆夫（長野県立歴史館上席学芸員）、② 6/18「火炎土器と野首遺跡」寺崎裕助（新潟県考古学会会長）、③ 6/25「利根川上流域から見た野首遺跡中期土器群」山口逸弘（公財・群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員）
平成29（2017）	郷土の遺産VI 雪 ① 6/10「北越雪譜を著した鈴木牧之」貝瀬香（南魚沼市図書館）、② 6/17「北越雪譜に見る雪国のくらし」笛木孝雄（南魚沼市文化財保護審議会会長）、③ 6/24「雪国の行事と食文化」大楽和正（新潟県立歴史博物館主任研究員）
平成30（2018）	郷土の遺産VII 信濃川 ① 6/9「信濃川と旧石器・縄文人の関わりについて」佐藤信之（津南町農と縄文の体験実習館なじょもん）、② 6/16「信濃川の河岸段丘—変動する大地の証拠ー」竹之内耕（フォッサマグナミュージアム）、③ 6/23「信濃川の木造船について」森行人（新潟市歴史博物館みなとぴあ）
令和元（2019）	郷土の遺産VIII 編布と織布 ① 6/15「奥会津昭和村のカラムシ栽培—日本各地と台湾の事例ー」菅家博昭（昭和村文化財保護審議会委員長）、② 6/22「縄文時代の編布—織布以前を考えるー」松永篤知（金沢大学資料館特任教授）、③ 6/29「上杉謙信・景勝と青苧」福原圭一（上越市公文書センター上席学芸員）

第10表 分じろう まちの文化歴史コーナー HAKKAKE の展示（2016～2021年度）

年 度	HAKKAKEの展示（期間）
平成28（2016）	「国宝・火焰型土器No.1 レプリカ」（4/下～6/3）、「国宝・火焰型土器No.5」（6/4～6/5）、「越能山都登」（6/6～7/1）、「長徳寺板碑」（7/2～10/3）、「中島遺跡出土品」（10/5～11/7）
平成29（2017）	「中島遺跡出土土器」（～5/2）、「国宝・笛山遺跡出土品（5/3）」、「中島遺跡出土土器」（5/4～5/29）、「十日町織物歴代見本帳」（5/31～7/31）、「縄文人の巨大ピアース樽沢開田遺跡出土品ー」（8/2～9/22）、「国宝・笛山遺跡出土品」（9/23～9/24）、「中里地域の釜神さま」（9/25～11/27）、「チンコロと節季市」（11/29～1/29）、「カンジキ・スカリーティー十日町の積雪期用具ー」（1/31～3/26）、「茂十郎の透綾—宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地ー」（3/28～）
平成30（2018）	「茂十郎の透綾—宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地ー」（～5/2）、「国宝・火焰型土器No.5」（5/3）、「国宝・火焰型土器No.1 高精細レプリカ」（5/4～5/6）、「茂十郎の透綾—宮本茂十郎手織の透綾（絹縮）裂地ー」（5/8～5/28）、「威信の石槍—向田遺跡出土品ー」（5/30～8/6）、「ツク（マブシ）とツク折り」（8/8～10/1）、「その硯は誰のものか—伊達八幡館跡出土品ー」（10/3～12/3）、「フクベ（夕顔瓢）—十日町の積雪期用具ー」（12/5～2/4）、「ワダラ」（2/6～4/1）
令和元（2019）	「清田山発見のヒシナイワシ化石」（4/3～5/2）、「国宝・火焰型土器No.5」（5/3）、「清田山発見のヒシナイワシ化石」（5/4～6/3）、「十日町市最古の狩猟具」（6/5～8/5）、「十日町市最古の文字」（8/7～10/7）、「弥生の小壺」（10/9～12/9）、「国宝・火焰型土器No.6」（12/10）、「唐津焼」（12/11～1/9）、「国宝・火焰型土器No.7」（1/10）、「唐津焼」（1/11～2/14）、「国宝・火焰型土器No.8」（2/15～2/16）、「中世の貨幣」（2/17～3/9）、「国宝・火焰型土器No.9」（3/10）、「中世の貨幣」（3/11～）
令和2（2020）	「中世の貨幣」（～4/9）、「石で作った斧」（4/10～6/8）、「紡錘車」（6/10～8/3）、「カルカロドン歯の化石」（8/5～10/12）、「イッカク（一角）の角」（10/14～12/7）、「珠洲焼の壺」（12/9～2/8）、「縄文土器と蓋」（2/10～）
令和3（2021）	「縄文土器と蓋」（～4/5）、「縄文土器の中に入った縄文土器」（4/7～6/7）、「古墳時代の器の形」（6/9～8/2）、「越中富山の（8/4～10/4）」、「動物意匠のついた縄文土器」（10/6～12/6）、「マジョリカお召とマジョリカ陶器」（12/8～2/7）、「弥生時代の土器」（2/9～）